# IFLAヨーテボリ大会を振り返って


| メタデータ | 言語:<br>出版者: 日本図書館協会<br>公開日: 2024-01-30<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 三浦,太郎<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/0002000189 |

小特集★IFLAヨーテボリ大会レポート

# IFLAヨーテボリ大会を振り返って

三浦太郎

## スウェーデン開催

アルフレッド・ノーベル（1833－1896）は，1866年，ニトログリセリンを改良してダイナマイトを発明したことで知られ，現在では「ノーベル賞」の提唱者として著名である。今年10月には鈴木章・北海道大学名誉教授と，根岸英一・米国パデュー大学特別教授が，パラジウムを触媒に炭素化合物をつなぐ化学反応（クロスカップリング）を汎用化させた業績を評価され，ノーベル化学賞を受賞した。ノーベルはスウェーデンの首都ストックホルムの出身であり，おそらく日本でその名を最も目にするスウェーデン人と言えば，彼をおいて他にいないように思われる。

スウェーデンと日本，この両国の架け橋となった人物としては，江戸時代に来日した植物学者ペーテル・ツュンベリー（1743-1828）がいる。ツュンベリーは，「生物分類学の父」として有名なカール・フォン・リンネを師にもち，1784年に『日本植物誌』を著して「日本植物学の父」とも呼ばれる人物であった。

彼は1770年にヨーロッパを出発し，アフリカ経由でアジアを旅していたが，1775年に長崎・出島を訪れ，翌年に将軍・徳川家治に謁見した。時は安政年間，老中・田沼意次が権勢を揮い，1774（安政３）年には杉田玄白らの手によって『解体新書』が翻訳刊行された，そんな時代のことである。

ツュンベリーの著した『江戸参府随行記』を繙くと，次のように記されている[1)]。“日本では学問はまだ発達をみていないが，そのわりに国民は，どんな仕事においてもその賢明さと着実さを証明している。日本人を野蛮と称する民族のなかに入れることはできない。いや，むしろ最も礼儀をわきまえた民族といえよう。彼らの現在の統治の仕方，外国人との貿易方法，工芸品，あふれるほどにあるあらゆる必需品等々は，この国民の賢さ，着実さ，そして恐れを知らない勇気を如実に物語っている。…この国民は必要で有益な場合，その器用さと発明心を発揮する。そして勤勉さにおいて，日本人は大半の民族の群を抜いている”。

近世以前に日本の風土をヨーロッパに紹介した人物はわずかであった。鳴滝塾を興したドイツ人医師シーボルトが日本の地を踏むのが，約半世紀後の1823（文政６）年のことである。…ノーベル，リンネ，そしてツュンベリーの祖国スウェーデンで，今年８月10～15日に「世界図書館情報会議（WLIC）：第76回IFLA年次大会」（IFLAヨーテボリ大会）が開催された。

▲ヨーテボリ市内

## 大会テーマ

スウェーデンでは過去3回，IFLA大会が開かれている（1930，60，90年）。通算4度目となる今回は，国内第2の都市ヨーテボリの見本市会場スヴェンスカ・メッサンで開催された。事前にはオーストラリアのブリスベンで開催の予定であったが，オーストラリア図書館情報協会（ALIA）の財政事情の悪化を理由として，昨年急遽，開催地が変更されたものである。

昨年までと異なり，分科会やグループの会合，および図書館訪問（ライブラリー・ビジット）はすべて初日（10日）に設定され，2日め（11日）に開会式が行われた。本誌10月号のNEWS欄に既報のとおり，今回の大会登録者は3,300名を超え，159のセッション，164の企業展示ブース，ポスター発表179件（申込受理）が集まった。日本からの事前登録者は26名である。このうち，河村宏・DAISYコンソーシアム会長と，廣瀬淳子・国立国会図書館調査局行政法務課主査が分科会で発表したほか，村木美紀・同志社女子大学学芸学部専任講師，鈴木史穂・福島県立安積黎明高校図書館学校司書，河村氏の3名がポスター発表を行った。

▲図書館訪問で見学したヒーシンゲン公共図書館にて

大会テーマは「知識へのオープンアクセス：持続的な発展の促進に向けて」である。これは，エレン・タイズIFLA会長が2009年の就任以来掲げている「知識アクセスを推進する図書館」という会長命題と軌を一にしている。タイズ会長は開会式のあいさつで，“知識へのアクセスは想像性と創造力への扉を開き，個々人が進歩することで社会全体が発展する”と述べた。

本大会では，大会テーマを大枠としながら五つのサブテーマが設けられ，各分科会のセッションはそのいずれかに区分けされた。

［IFLAヨーテボリ大会サブテーマ］

(1) オープンアクセスとデジタル情報源
(2) 政策，戦略，広報
(3) アクセスやサービスへの利用者要望
(4) ツール，技術
(5) アイデア，刷新，新しい局面への期待

## セッションの特色

これらのサブテーマに沿って，筆者の参加したいくつかのセッションを紹介したい[2]。まず，(1)を扱ったものとして「『読む権利』：疎外される人びとをどうやって知識社会に包摂するか」（13日13:45〜15:45。「特別なニーズをもつ人びとへの図書館サービス（LSN）分科会」と，「印刷物を読むことに障がいをもつ人びとにサービスする図書館（LPD）分科会」の共催）がある。

このセッションでは，まずマーガレット・マックグロイCNIB（カナダ盲人援護協会）副会長が「グローバルにアクセス可能な図書館プロジェクト」（GALプロジェクト）について紹介した。現在，世界中で文字を読むことが困難な人びとに届く印刷資料は全体のわずか5％に過ぎないと推計されるが，そうした人びとが利用できるよう，現在，GALプロジェクトにおいて政府・出版社・書店・図書館が協同して，コンテンツ変換した共同コレクションを形成する新たな枠組み作りが行われている旨，報告された。

続いて，TPB（スウェーデン国立録音点字図書館）のジェニー・ニルソン女史が「アップル・シェルフ」の取り組みについて述べた。スウェーデンでは1993年以降，文字を読むことに障がいのある子どもたち向けに，さわる絵本，読み聞かせ本，読みやすい本（Easy-to-Read Books），点字本などを提供するコーナー「アップル・シェルフ」が広がっており，文字による読書が不自由な児童たちに対する認識は近年，近隣諸国でも高まりつつあるという。

▲ヨーテボリ市立図書館の「アップル・シェルフ」

その後のパネル討論では，LSN議長のモサイド・トーン女史が司会進行を務め，タイズIFLA会長，河村氏，およびLPD議長のジュリー・ライ女史が登壇した。このうち河村氏は，南アフリカにおけるエイズ啓蒙活動や，2007年にタイで起きた津波被害からの復興活動など，DAISYを活用した具体的事例を数多く取り上げながら，“DAISYは，障がい，年齢，病気，難読症（ディスクレシア）などの理由によって，あるいは（自動車で運転移動中のような）状況のために読むことができない人びとに対して，最適な読みを提供する合理的方法である”と主張した。

あらゆる人びとの利用に図書館を開く。理念としては崇高だが，実質的に保障することの難しかったこの命題に対して，本セッションでは現実化のための具体事例が検討されており，有意義な討論の場であった。

サブテーマ「⑵　政策，戦略，広報」を柱としたセッションでは，「国の図書館戦略に向けて：第１部　図書館広報の改善」（12日9:30〜12:45。「図書館協会運営（MLA）分科会」ほか４分科会と１グループの共催）がある。広報（アドヴォカシー）の必要性については，クラウディア・ルクスIFLA前会長が在任中に強く主張していたところであったが，このセッションでも冒頭に，MLA議長のジャニス・ラシャンス女史から，“従来，広報は必ずしも成功してこなかった領域であり，どのように行うか課題である”といった問題提議があり，その後，５件の事例報告が続いた。

報告のなかではALIAのスー・ハトレー女史から，2012年のオーストラリア読書年に向けて，国内50以上の図書館協会が結束し，現在，「“Love 2read”キャンペーン」を展開している状況が紹介され，他機関と連携してPRする実践事例が報告された。ただ残念ながら，それ以外の発表は，「チリ・ラトビアなど5か国におけるICT利用実態調査」「クロアチア図書館協会における専門職の扱い」といった内容であり，広報にはほとんど言及されなかった。セッション全体として見るとやや拡散した感がある。多数の分科会でセッションを共催する場合には，問題意識の擦り合わせが求められると思われる。

サブテーマ「⑶　アクセスやサービスへの利用者要望」関連のセッションでは，図書館情報学教育における新技術の事例紹介が目に付いた。「グローバルな学習システム：いかにして学び，知識を共有できるのか」（13日9:30〜12:45。「ナレッジマネージメント（KM）分科会」ほか２分科会の共催）では，米国カリフォルニア大学サンノゼ校におけるオンラインクラスの学習状況の報告があった。北米だけでなくハワイ，それに日本を含めたアジア地域の学生も聴講しており，実習（インターンシップ）以外の科目はバーチャルで受講可能だという。こうした遠隔学習に向けた基盤整備は，今後さらに重要性を増すものと考えられる。

▲会場内の様子

また，大会最終日の「学習や専門職の発展にe-ポートフォリオがいかに貢献するか」（15日13:45〜15:45。「E-ラーニング（EL）グループ」主催）でも，スロベニアやオーストラリアにおけるe-ポートフォリオを使った授業・研修の事例が紹介された。近年，学生や図書館員が自己PR資料や個人プロ

フィールを公開したり，SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）機能を通じて情報交換を行うことが広がりつつある。ニーズに応じた情報提供から，ニーズを開拓する情報発信へ。図書館関係者の積極的なサービス姿勢が求められ始めていると言えよう。

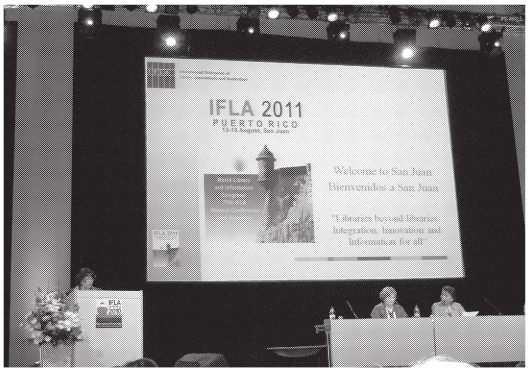
サブテーマ「(4)　ツール，技術」に関しては，「図書館の再構築：図書館・コレクション史における物的証左」（12日16:00〜18:00。「貴重書・手稿本（RBM）分科会」主催）が興味深かった。なかでも，フランス国立図書館に所蔵される16-17世紀の製本コレクションのデータベース化に関する発表では，美しい装丁本を多様な角度から見ることのできるデジタル資料の作成について，豊富な図像資料をもとに紹介されていた。人文科学研究においてテキストの符号化や交換のための標準を定めたTEI（テキスト符号化イニシアチブ）を枠組みとして用いているという。

また，サブテーマ「(5)　アイデア，刷新，新しい局面への期待」の関連でも，「家系および地方史：次世代に受け継がれる遺産」（11日13:45〜15:45。「系図・地方史（GLH）分科会」主催）において，デジタル技術の応用事例が紹介されていた。19世紀スコットランドのハミルトン宮殿を再現した「バーチャル・ハミルトン」についての報告では，設計図や当時の外観写真，肖像画の背景，財産目録，建築家の残したメモなどを手掛かりに，1870年代の宮殿を忠実に再現する過程が示された。

また，同じセッションでは，スウェーデンのイェーブレ市における図書館・アーカイブ・博物館の連携に関する報告もあった。デジタル化を基盤とする，こうした機関横断的連携の利点として，利用者アクセシビリティの増大，専門職ネットワークの構築，雇用の創出，予算縮減への対応といった点が挙げられた。

## おわりに

IFLA分科会には，現在，11名の日本人図書館関係者が委員として参加している。委員各位にはご多用中のところ参加していただき，この場を借りて御礼申し上げたい。合わせて，発表者・参加者の方々にも感謝申し上げる。




▲閉会式におけるIFLAサンファン大会の紹介

また，12日夜にはドイツ文化センター（スウェーデン支部）主催の夕食会に，平田泰子委員とともに招待された。声をかけていただいた同センター東京支部のクリステル・マーンケ図書館長にも，心より御礼申し上げたい。

13日夜には，日本からの参加者のうち現地で連絡の取れた方たちを中心に14名が集まり，運河沿いのレストランRiver Cafeで食事を楽しんだ。現地の日本人の方も交えて相互に歓談することができ，貴重なひと時であった。

来年以降，IFLA大会はサンファン（プエルトリコ），ヘルシンキ（フィンランド）の開催が決まっている。翌2013年にアジア・オセアニア地域での開催が予定されており，シンガポール，マレーシアに加え，国立国会図書館を中心に日本も横浜開催を視野に名乗りを上げている。正式発表は来年8月13〜18日のIFLAサンファン大会まで持ち越されるが，もし実現されれば，1986年東京大会以来，27年ぶりの快挙となる。末筆ながら，IFLA分科会委員の方々をはじめ，関係の皆さまに，心よりご協力をお願い申し上げます。

**注**

1）C・P・ツュンベリー『江戸参府随行記』（高橋文訳）平凡社（東洋文庫583），1994年，p.219-222.

2）各セッションの発表資料については，IFLAホームページ「プログラムと会議録」［http://www.ifla.org/en/conferences-sessions/216］で，その多くを見ることができる。

（みうら　たろう：JLA国際交流事業委員会委員長，明治大学）

［NDC 9：010.6　BSH：国際図書館連盟］